

---

# **最強主人公もどきが消えるまで**

片岡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最強主人公もどきが消えるまで

### 【Zコード】

Z5293Z

### 【作者名】

片岡

### 【あらすじ】

モバゲーで公開しているもの。あっちでは『ありがち最強主人公が消えるまで』。全然モバにありがちな最強主人公にならなかつたので題を変えました。

加筆修正してあるのでモバのほうとは色々と違いが出ています。でもきっと初見の方が多いはずなので其処はあまり気にしないで大丈夫かな。

内容はそのままです。主人公が“最強主人公”を消す話です。色々キモいです。この作品の主成分はヤンデレです。ご注意を。

一話一話の長さは全然揃つてない。

タグの“腐った人”からはモバでつけていただいたタグです。

不快？理解不能？我々の業界では（ある意味）褒め言葉ですが何か。

## 初めまして、最強主人公アンチ派です（前書き）

話が進むにつれて身勝手なヤンデレたちが多数登場。

会う人には中々好評な作品ではありましたが、合わない方は本気で  
合わないみたいなので注意。

温いけど色々あれれな表現も。

“あ、こりゃもう駄目だ”とか思われましたら逃げて下さい。

## 初めてまして、最強主人公アンチ派です

魔法。それは、俺たちにとつては必要不可欠なものだ。

魔法がなければ此処までの人間の進化は有り得なかつたし、そもそも生存することすら不可能だったと言われているほど。それは誰にでも扱えるもので、これが使えない者は落ちこぼれとして見なされる。

しかし、誰にでも扱えると言つても才能というものがある。その才能を伸ばす為、魔法学園といつ魔法使いのための学園が作られた。

そんな俺たちの通う魔法学園に、ある入学生がやつてきた。  
その入学生の名前はカイト・リーブル。此処らでは有名な“落ちこぼれ” だった。

「おい、何を見ているんだ？」  
「つマキ……」

不意に声をかけられ、思わずびくつく。俺の様子を見て、すまん、と謝ったあと、俺の友人であるマキはまた訊ねた。

「ああ……、ああ、ちょっと、」

言葉を濁す俺を不思議に思ったのか、俺の視線の先を辿り、マキはあからさまに顔を曇らせた。

「、早く行こう」

早く此処から離れたい、とマキは俺の腕を引く。其処から離れる前に、もう一度楽しそうに笑つあいつらを窓から見下ろし、目を伏せた。

木漏れ日があいつらを包み込んで、容顔は整つていてあいつらだから、とても神秘的な一つの絵のようだった。

「……カイト・リーブル」

かの有名な現・闇帝の息子を親友に持つ。

「カイトは博識ですね！」

現・光帝の娘と、この学園自慢の天才少女を惚れさせて。

「わあ、カイト、凄い！」

「カイト……、凄いね。私でさえ知らなかつたことを知つてゐるなんて」

魔法が使えなかつたのは実は全属性を持っていて、それらが互いに相殺しあつていたから使えなかつただけ。

今はちゃんとコントロールできるようになつたからこの大陸でも五本の指の中にはに入る天才魔法使いになり。

SSランクの任務で手を抜けるほどの実力で。

誤解が解け今までずっと縁を切られていた家族ともよりを戻し。

ああ、ああ、良かつたな。恵まれてるな。幸せだな。今までの苦労が報われたな。おめでとう。

でも知ってるか？ その幸せの裏でどれだけの人間が傷つき、悲しんだか。

「……俺は、自分のことしか考えられねえからわ」

お前も幸せになる権利はあるよ。あるんだろうな。だけど、その代わりに俺の友達が傷つくのはさ、納得できねえな。

初めまして、カイト・リーブルアンチ派です  
(最強とか、天才とか、悲劇のヒーローとか)

## 初めまして、最強主人公アンチ派です（後書き）

ラーランクとか言つちゃつてるけどギルドとか出できません。  
そうです。ギルドの仕組みを私がよくわかつていないだけです。

## 俺の友達

俺には友人が何人かいるが、特に親しいのが一人、一学年下にいる。そのうちの一人がマキ・シグナルだ。

シグナルの名を聞いたことのない魔法使いは、まずいないと思う。魔法界には魔法の皇帝と呼ばれるほど、魔法に優れた方たちが四人いる。

光帝、闇帝、土帝、水帝。その名の通り、それぞれの属性を得意とする魔法のエキスパートたちだ。

そしてマキは現・水帝の息子。子供ながらにかなりの実力を持つ奴だけど、その実力の裏には多大な努力が隠されているということを俺は知っている。

俺以外にもマキの努力を知っている奴がたくさんいたから、マキは僻まれることもなく、たくさんの友人を持って毎日楽しそうに笑っていた。

しかし、そんなマキが今、酷い虐めに遭っている。それは、あることが原因だった。

いつだつたか、リーブルたちが闇帝の息子と光帝の娘と学園一の天才を引き連れて歩いていたんだ。迷惑なことに、廊下のド真ん中で横に目一杯広がって。

勿論、人にぶつかるな。そんなことしてたら。

そうしたら案の定、マキの友達（ちなみに俺の友達でもある）が

ぶつかって怪我をしてしまったんだ。

正義感が無駄にあるマキは猛烈に怒って、リーブルを校舎裏に呼び出した。

「お前、いつたいどういうつもりだ!! 人にぶつかっておいて、謝りもせず、それどころかあいつを怒鳴りつけるなんて!」

「は……? なんの話だよ

頭に疑問符を浮かべたリーブル。ああ、それが普通の反応だろうな。いきなりそんなこと言われたって、わからないと思う。

俺はこのとき、ちょうど二人して校舎裏に行くのを目撃したから心配になつてついていった。ストーカー? うるせえよ。

「ミックだ! ミック・チゼッタ! -! -!

「ああ、あいつ

リーブルは面倒臭そうな顔をした。マキは顔を怒りで真っ赤にしてリーブルをきつく睨みつけている。

少しうちにこうかとも思つたけど、俺まで加わつたらリンチとかつて勘違いされそうだ。出ていかないほうが良いかもしれない。

ただでさえリーブルは学園で一番人気のあつた光帝の娘を惚れさせてるつてんで妬まれてるから。取り巻きは結構そういうのに敏感になっている。

此処で、そんなことを気にしないで出ていけば良かったんだ。

「しかもあいつは怪我もしていたんだぞ！　あいつはちゃんと脇によつてお前たちを通そうとしていたし、明らかに非があるのはお前たちのほうだ！」

「…………」

「……人の迷惑ぐらい、考えたらどうだ」

溜めこんでいた文句を全部吐き出して少し冷静になってきたのか、声を抑えてマキは最後にそう言った。

すると、リーブルは舌打ちをしてため息を吐いた。

「はあ？　意味わからんねえ」

「……は？」

マキはポカンとした顔をした。俺も多分そんな顔をしていた。リーブルの言った言葉が、一瞬理解出来なかつたんだ。あまりにも、想像してた言葉とはかけ離れ過ぎて。

「だいたい、そいつも魔法使いのはしくれなら初歩の回復魔法くらい扱えんだろ。怪我したなら、治せば良いじゃん」

「つか、！」

「わかつたなら、さうさとどつか行けよ。オレはこれから用事があんだつての」

いや、何もわからない。多分マキもそう思ったと思う。それと同時に言い表せないほどの怒りがマキから冷静さを奪つて。

「お、前ええツ！！」

だからあんなことをしてしまったのだと想つ。リーブルを殴るなんて、そんな馬鹿なこと。

相手との実力差がわからない馬鹿じやない。相手が周りからどれだけ慕われている人間かわからない馬鹿じやない。そんな人間に危害を加えるなんてことしたらどうなるかわからない馬鹿じやない。だけど、そんなこと考えられないくらい、マキは怒っていたんだ。大切な友人のために。

「ツ何しやがる！？」

情けないことに今まで俺は固まっていたんだが、リーブルの声にやつと我に返つて慌てて止めに入った。

そして怒りで興奮するマキをなんとか宥めて、血室に無理矢理押し込んだ。

そして次の日。マキの下駄箱は「ミミで溢れ返り、誰かの横を通り（主に女子だったと思う）魔法を仕掛けられたり、足を出され転びそうになつたり。

まるで、子供のような嫌がらせ。最初は鼻で笑っていたマキも、

それがずっと続くと日に日に疲れた様子を見せていた。やつれて、顔色が悪い。

勿論、これらのこととは昨日のことが原因だ。

リーブルは容顔が有り得ないくらいに整っている。そんなあいつが顔を真っ赤に腫らして帰ってきたものだから、クラス中は大騒ぎになつた、らしい。

どうしたと訊いてきた奴には“マキ・シグナルに殴られた”と大声で喚き、訊いてもいない奴にも“マキ・シグナルに殴られた”と大声で喚いたという。

結果、マキは学園中の敵に。しかも、よりもよつてマキはあるの氣違いと同じクラスだ。本当に、可哀想に。  
俺は、何も出来なかつた。

可哀そうな俺の友達  
(あんまり涙を見せないあいつが泣きながら言つんだ) (助けてくれつて)

## もう一人の俺の友達

前にも言つた通り、俺には特別親しい友人が一人いる。そのもう一人の友人がミック・チゼッタだ。

実は、こいつは現・土帝の息子だ。凄過ぎる友人たちに囲まれて俺の存在が露んでいるように思える。と、まあ、それは置いといで。少し気が弱いのが玉に瑕きずだが、優しくてとても良い奴だ。……優しそうのも、玉に瑕だ。

実力はあるのに、ほやほやここにこしているからかミックは馬鹿にされやすい。

だけど、やつぱり穢やかな奴だから、リーブルたちに不當な扱いを受けても「ぼくは大丈夫だから」と苦笑して、俺たちを宥なだめる役に回っていた。

怒つても、何も悪くないのに。

一度、どうしてそんなに笑つていられるのかと訊ねたことがある。すると、ミックは笑つていつた。

「馬鹿にされるのは確かに悲しいけど、その分僕が頑張つて馬鹿にされないようにすれば良いだけでしょう?」

どうしたんだろう、こいつ。どうしてこんなに良い奴に育つてるんだろう。お兄さん、思わず目頭が熱くなりました。  
健氣過すぎるぞお前……！

だけど、そんなミックが最近、苛々している。

「ねえ、僕、胸の此処が、凄くムカムカするんだ。……気持ち悪い」

昨日は笑顔でそんなことを吐き捨てていた。少し怖かった。

原因はマキが受けている理不尽な苛めだ。

苛めといつものまあ理不尽なものだが、その理由がマキの場合、あんまりにも理不尽すぎる。

マキはミックに怪我をさせたりーブルに謝罪を求めにいつただけだ。だといつのこと、あいつが意味のわからないことを喫きだすから、こんなことになってしまった。

確かに、こっちも手を出したのは悪かった。俺たちは確かに、悪いことをした。

でも、そういうことをする原因となつたのはやっぱりあいつで。

……俺の考えがマキ寄りなだけなのかもしれないが、俺にはマキが悪いことは到底思えなかつた。

ミックもそう思つてゐるからこそ、苛々してゐる。ミックのあの気の抜けるような可愛い笑顔が、俺たちにとっての何よりの癒しだった。

「怖いんだ、僕。こんなに真っ黒な感情を抱えて、自分が自分でなくなつてしまつようで……」

泣いて、それでも苛立ちを抑えられなくて。

最近のミックの眉間に深い皺。目つきは鋭く、口を固く結んで。苦しい、痛い、ムカつく。目を赤くして、表情を怒りの色に染め上げて。

怒りを露わにすることは少なかつたミック。ストレスで胃に穴が開かないことを祈りひ。

もう一人の、最近苛々してゐる俺の友達（あんまり怒らなかつたあいつが眉を吊り上げて垂つんだ）（あの子、赦せないよねつて）

## もう一人の俺の友達（後書き）

ちなみにモバでありがちだった最強主人公の設定

- ・容姿は上の上（笑）お寿司。
  - ・めっちゃ落ちこぼれ。魔法使えない。
  - ・実はフェイク。ギルドではかなりの実力者。なんか通り名ついてる。
  - ・なんで落ちこぼれのふりしてんのかは結構あやふやにされてる。実際なんでだろうね。思いつかない。
  - ・美少女ばっかに好かれる。周りに美形しかいない。
  - ・作中に不細工は絶対に出てこない。出てきてもなんか可哀想な役回り。
  - ・ライバルが物凄く安っぽい。だいたい性格の悪いお坊ちゃんとかヒロインのことが好きで嫉妬に狂った不細工。
  - ・だいたい授業はサボって何処かで寝てる。勉強しろ落ちこぼれ。
  - ・なのに何故か先生から信頼されてる。可笑しいだろ。
- だいたいこれくらい押さえとけばこの作品を読むのに支障はないでしょう。

## 使い魔は大天使

今まで馬鹿な行動を散々とつてきたリーブルだったが、此処にて、またしても馬鹿げた行動を起こしてくれやがった。

我が魔法学園では、高等部に進級して、（リーブルにとつては入学して）五ヶ月ほど経つてから使い魔を呼び出す授業が行われる。使い魔とは地獄（魔界ともいう）、もしくは天界から俺たち魔法使いが使役するもので、だいたいの魔法使いは使い魔を従えている。

ちなみに、俺はあいつらより先輩だから、それはすでに済ませてある。

俺の使い魔はなんでも神獣という奴らしい。狐みたいな姿で、これがまた愛らしい。今や俺たちの第一の癒しと化している。もふもふは正義だ！ 悪い、ちょっとと宣言したくなつたんだ。

ところで、優秀と言われている俺でさえこいつを召喚したときに腕を一本持つていかれたというのに、あいつは無傷で俺より格上の奴を召喚したんだという。

それは素直に凄いと思う。あいつの性格は認めちゃいないが、あいつの実力だけは認めている。

あ、腕は運良く喰われなかつたので魔法でくつつけた。痛かつた。泣くかと思った。寧ろ部屋で召喚したばかりの使い魔を抱き締めながら泣いてた。

後で心配してくれたマキとミックにドン引きされた。

使い魔以前に神獣に渾名をつけるのってどうなのとか聞こえない。

話を戻そうか。

それで、あいつも使い魔を呼び出したんだ。リーブルが呼び出したのは大天使だ。そういえば、俺の使い魔もこいつの使い魔も“魔”じゃないな。

現・闇帝の息子は闇の精靈の長。現・光帝の娘は光の精靈の長。天才少女はドラゴン。マキは水の精靈の長。ミックは土の精靈の長。

今年の一年は、実力を持つた奴がまるで狙ったかのように集まつたと思う。正直いつか抜かれてしまふんじゃないかとひやひやしている。

それで、リーブルが起こした問題というのが、その、天使との肉体関係、だ。うん、まあ、詳しく言わなくとも察していただけると思う。

誘つたあいつも悪いが、それに乗つた天使も悪い。随分な尻軽天使だつたらしい。

あいつの顔に釣られてあっさり……、じり……。これ以上俺の口から何も言わせないでくれ。

だいたいそんなことであればよく大天使だなんて位につけたものだと思う。本当不思議だ。

勿論、神はお怒りになられた。それはもうかなり。

お陰でキーちゃんも怒られてしまつたらしい。とばつちりだ。ハつ当たりなんて神様も随分人間らしいところがあるな。

天使というのは清らかな存在でなければならない。清らかそのものであるような存在の直属の部下なんだからな。当たり前だ。

それが精靈ならまだ……、いつ……、いけたかもしないのによりにもよって相手は人間だ。  
もう誰にも庇い立ては出来ないだろう。あいつは神を敵に回したんだ。

使い魔は尻軽大天使

（ああああ主様どうか慈悲をお与え下さい……）（考え無しお間抜  
け大天使様が墮ちていく）

## 俺の好きな人

唐突だが、俺はまだ十七だ。大人なのか子供なのか、微妙な年齢。ぶつちやけ勉強よりも友達と遊んでるほうが好きだ。机に向かってノート開いてるよりも森や洞窟に行って探検するほうが好きだ。何が言いたいのかというと、普段大人っぽいとか言われててもガキみたいなところがあるわけで。

一応、恋愛とかにも興味があつて、いや、うん、はつきり言ひ。好きな人がいるんだ。

俺の好きな人は学園の近くにある教会に住み込みで働いてるシステムだ。名前はセーラ。

ちょっと、あれ？ って思つたる。

……察しの通り、シスターっていうのは神に全てを捧げた女だ。

俺なんかと汚い関係を結ぶことは許されない。

まあ、報われない恋とはわかっていてもだな、それでも俺はあの人が好きなんだ。想うだけなら、良いだろう？

ええっと、それで、最近その人、顔を真っ赤にしてボーっとしたり、食欲がなくなつたりと、ちょっとおかしいんだ。  
嫌な予感がして、訊いてみた。もしかして、

「なあ、シスター」

教会脇にある花壇に水をやっていたシスターが、俺の声に反応して振り向いた。茶色の髪がさらりと揺れた。

「なんでしょう？」

「もしかして好きな男でも出来たか？」

俺とシスターは結構仲が良い。勿論、それは俺の影ながらの努力があつてのものだけだ。

とにかく、仲が良いからよく相談を受けたりしていたんだ。だから、俺は今回もシスターの悩みを訊くという名目でこの胸の内の不安を取り除こうとした。

だけど、

「、つあ……。え、ええ……」

頬を染め、シスターはそつと俯いた。いや、もうな、このときの俺のショックは言葉じゃ言い表せない。冗談抜きで死にたかった。シスターは至つて平凡な顔立ちだけど、このときの顔は凄く可愛しかった。でも、シスターにこんな顔をさせてるのは俺じゃなく、何処かにいる俺の知らない野郎。

想像してみる。惚れた女が自分以外の男のことで顔真っ赤にしているんだ。死にたくなるだろう。

「へえ、そうか！ どんな奴なんだ？」

ああ、今俺は笑えるか？ いつも笑いでシスターの悩みを、恋の相談を聞けているか？

なあ、そいつ良い奴なんだよな。シスターが惚れた男だ。きっと、俺が敵わないくらい男前で、優しくて、完璧な奴なんだろ？

そうと言つてくれ。そうすれば、きっと諦めもつく。

期待にも似た気持ちでシスターを見つめる。シスターは恥ずかしそうに目を伏せて、呟いた。

「……知っていますか？ あなたの学園に入学してこられたと思うんですけど。……カイト・リーブルさんという方で、」

どうしてよりもよつてそいつなんだと。

リーブルは確かに実力はある。俺たちでも難しい任務だって一人で軽々とこなしてみせるというし、天才と言つても過言じゃない。

だけど、聞く限り見る限りじゃ性格は最悪だ。

だけど、シスターが惚れた男なんだから。きっと俺がまだ知らないだけで、何処か良いところがあるんだろう。そうじゃなきゃ、悔しがり過ぎる。

「……シスター。大丈夫なのか？ その、シスターは神に全てを捧げた身で……、」

「わかつています」

間髪入れずシスターは答えた。真っ直ぐに俺を見つめている。  
不安と、そして幸せな恋の色に染まつた瞳で。  
目が、逸らせない。

「でも、それでも好き……なんです」

ぞくりと、した。浮ついているよつて、その言葉の芯はどうしつ  
と重い。シスターは、本気なんだ。

たつたそれだけの言葉で理解出来た。理解出来てしまつた。シス  
ターのどんなことでもわかるよつて、ずっと傍で見てきたから。

「どうしたら良いと、思います？」

シスターはそう訊ねた。

ああ、やめる。もう、耐えるんだよ。悪いのは俺だから。いつま  
でも行動に移さず、友達なんかで満足してた俺が悪いんだ。

「……告白するしかないんじゃねえか？」

「告白」

「、ああ」

顔を真っ赤にしてシスターは俯いてしまつた。困つたよつて視線  
を足元の辺りでうろつらさせている。

嘘。嘘嘘嘘嘘。嘘だシスター。やめてくれそんなことしないで。  
シスターは本当に良い女だから。だからリーブルがそれに気付いて  
しまったら、シスターがリーブルに取られてしまう。  
でも、偽善でもなんでも、俺はやっぱりシスターに幸せになつて  
ほしくて。

「頑張れよ！俺も出来る限り協力するから」

可愛い可愛い俺の好きな人  
(でもその人は俺じゃない誰かを見ていた)

俺はそのままから頑張ってシスターを応援した。泣いてたマキも苛々してたミックも俺を気遣わしげに俺を見る。

「「あんな、お前ひがこんなに苦しご想こしてるの」「俺は……」

いつして言葉に出してみると、自分の中心的な行動と考えを直視させられて嫌な気分になる。

でも、やめるわけにはいかない。自己満足ではあるが、せめて、とマキたちに謝ると、慌てて顔を上げさせられた。グキって嫌な音がした。

「うぐつ、！」

「「あ、そんなの……！ 僕はお前たちと一緒にいれて、それだけで

気が楽になるし、」

眉を下げる、マキは困ったように笑った。やつひくてくれたのは嬉しいけど、まづ手を離してほし。

俺はマキの手に自分の手を当て、さつ氣無く顔から退かした。ミックもおずおずと横から声を出す。

「大丈夫だよ。ぼくたちはそんなの、気にしてないから。あのね、でも、」

「そうか。……ありがとう」

あいつらが何を言いたいのかは気付いていた。

でも、それを言われてしまえば俺は、今度こそ諦めきれなくなる。だから遮つた。俺の意図に気付いた二人はため息を吐いた。

「……僕が言えることじゃないけど、無理はするなよ」「辛くなつたら、あの、いつでも言つてね？」

俺は笑つてみせた。

俺は学園内を彷徨い、リーブルを探していた。  
リーブルを連れて、教会にいるシスターに会わせてやるのが俺の役目。シスターは其処でリーブルに告白する手筈になつている。  
単純？ 知つてるよ、うるせえな。でも、こういつ方法のほうが却つて良い気がするのは俺だけか？

「あ、いた」

よくリーブルが出没する中庭を探してみると、あいつはいた。珍しくリーブルは一人で歩いていて、時折立ち止まつては何か（花か？）を見ている。取り巻きたちはどうしたのか。だが、いなほうが好都合だ。いたら喧しへ騒ぐに違いない。あいつらは被害妄想が過ぎる。

「えーと、……よお」

とりあえず近付いて声をかけてみる。なんだかかなり気まずい。今すぐにでも逃げ出したい。胃液を吐きそうだ、っていうのはさすがにないが。

リーブルは訝しげな表情で振り向いたが、俺の顔を目に入れると、目を見開いた。な、なんだ、なんだ？

「あ、あんたッ……！」  
「……覚えてたのか」

予想外だ。リーブルはあのとき　マキとリーブルの殴り合いを止めたとき　のことを覚えていたようだ。

あんなの会つた内にも入らないだろ？と思つて初対面の振りして話しかけた自分を殴つてやりたい。恥ずかしい。悪い、前途多難だシスター。

「お、覚えてるに決まってる！　それで、俺になんの用なんだ？」

「少し、散歩に出ねえか？」

俺は阿呆なんぢゃないだろ？ 明らかに敵対関係にあると思われる人間に散歩に誘われてついていくる馬鹿が何処にいるんだ。しかも其処まで親しくもない。これは出直すしかないな。

「ああー。」

あ、此処にいたわ。

やけに嬉しそうに頷くあいつ。何故だ。俺がマキに愛想を尽かして自分側についたとでも思つていいのだろうか。

まあ、どうでも良いと俺はリーブルを連れて教会に向かった。

「シスター」

見慣れた背中が教会の庭にある花に水やりをしている。俺はそれに迷わず声をかけた。

細い肩がびくんと跳ねて、勢い良くこっちを向いたシスター。じゅうろに入っていた水が跳ねて修道服にかかりた。わたわたと慌てている。可愛い。

「も、もつ……？」

「ああ」

驚いている、だがとても嬉しそうしているシスターには悪いが、俺はこれ以上此処にいたくない。

シスターは最早、俺など眼中にないよつで一心に俺の背後にあるリーブルを見つめている。

今すぐシスターの恋路を全力で邪魔したい気持ちに駆られた。そんなことしたら俺の今までの苦労と我慢が水の泡だからしないけど。

「、頑張れよ」

「」そりシスターの肩を優しく叩き、声をかけて背を向ける。シスターは俺を見て、力強く頷いた。

そのまま去つていこうとする俺に、リーブルが不思議そうに話しかけた。

「……？　おい、何処に行くんだ？」

「忘れ物したんだ。少し、此処で待っててくれねえか？」

散歩に行くのに句を忘れて困ると言つのか。

怪しく思われてしまつただろうかと恐る恐る様子を窺つてみると、なんの疑いも持つていないうだ。早く戻つてこいよ、とかほざいている。

秀才だとか言われてるけど、こいつ実は馬鹿なんじやないか

……？

とりあえず、適当に返事を返しておいた。そしてちょうど良い木陰に隠れる。

程よく近く、しかもあちらからは死角になっているのでよほどのことがない限り見つかることはないだろう。

「あ、あの」

退屈そうに佇むリーブルに声をかけるシスター。頬は可愛らしく紅潮している。拳を白くなるほど握り締めていて、傍目から見てすぐわかるほど緊張しているようだ。

「……なんだよ」

面倒臭そうにリーブルは返事を返した。此処で無視とかしていたら俺は間違いなく飛び出してリーブルに渾身の力を籠めたアッパーを決めていただろ。多分避けられるけど。

シスターは少し傷ついた素振りを見せるが、健気に笑顔を作った。

「カイト・リーブル……さん、ですよね。私は、」

「は？ なんでお前オレの名前知ってんだよ。気持ち悪い」

えっ？

思わず声に出してしまって口を塞ぐ。大丈夫、気付かれていない

はず。それよりも意味がわからない。どうこうことだ。何が起つた。

あいつは今、なんて言った？

「え……。あ、あの、私、貴方のことが好きで……！」

「だからストーカーか？ 気持ち悪い女だな。一度とオレに近付くな」

嫌悪の籠った、瞳。

シスターは顔を真っ青にさせた。俺は愕然とした。

「なん、で……！」

なんで、なんで、なんで！！

どうして自分の名を知っているか？ そりやお前が此処らでは有名な落ちこぼれだったからだ。

此処らでお前の名前を知らない奴はただの世間知らずの坊ちゃんと御令嬢ぐらいだ。それくらい、少し考えればわかるだろう？

ストーカーだと？ ふざけるな。シスターがそんなことするわけないだろうが羨ましい！ シスターにそんな性癖があるなら俺がストーカーされたい！

……じゃなくて、シスターはそんなことはしない。うん。

顔を覆つて教会の中に走つていってしまったシスター。リーブル

は面倒臭そうにそれを見るだけ。

今にもリーブルに殴りかかってしまいたいと震える拳を抑えつけ、

俺はその場に戻った。

リーブルは俺が来たとみると顔を輝かせて此方に手を振った。  
シスターにあんな酷いことをしておいて、どうしてそんなに無邪  
気に笑えるのか、俺にはわからなかつた。

「随分遅かつたけど、何してたんだ？」

「……急用が出来たから、帰つてくれるか」

笑顔で訊ねるリーブルに答えは返さず、俺は冷たく言い捨てた。  
大きく見開いたその中心に、俺が映つてゐる。俺はこんなに冷た  
い顔が出来たのか。少し、驚いた。

「は？ ちょ、ちょっと……」

「帰れ」

もう一度言った。

まだ納得のいくつなざそうな顔をしていたが、俺は無理矢理リー  
ブルを帰した。

何度も振り向いて此方を窺つていたリーブルだが、そのうち  
寂しそうな顔をして消えていった。多分、移転魔法を使つたんだと  
思う。

それを見送つてからすぐさま教会の中に入る。入った瞬間、シス  
ターに泣きつかれた。

小さく嗚咽をもらすその身体を抱き止め、慰めにもならないだろ  
うがシスターの背を優しく叩いた。

……あ、本当に最悪だ。何がって、全部が。

俺の敵

(お前、最低だよ)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5293z/>

---

最強主人公もどきが消えるまで

2011年12月29日18時55分発行